

電子オルガンの教育楽器としての可能性

—電子オルガンの裾野を広げる試み—

パネリスト：西山淑子（昭和音楽大学）、小林ひとみ（カワイ音楽教室）、
高橋 豊（エレクトーンシティ渋谷）

司会：柴田薫（昭和音楽大学） 書記：金銅英二（松本歯科大学）／文責

柴田：これまで本学会の電子オルガン部会では電子オルガンにおける音楽表現の変遷や現在の取り組みについて、また電子オルガンの音楽表現の集大成で最前線となる電子オルガンコンクールにも焦点をあて討論を繰り返してきた。今回のパネルディスカッションでは視点を電子オルガンの頂点・最前線から裾野の拡がりに切り替え、電子オルガンの教育楽器としての可能性を考える場として企画を考えた。パネリストをお願いしたのは長年にわたりピアノレッスンに電子オルガンを活用しておられる西山先生にその取り組みについてお話を頂く、そして四国でカワイ音楽教室の講師として電子オルガンの指導、演奏、そして生徒募集などを熱心に展開しておられる小林ひとみ先生にお話頂く、さらにエレクトーンシティ渋谷所属の演奏家として様々な演奏活動を展開しておられる高橋 豊先生に他の楽器を担当する共演者の反応から電子オルガンの新たな地位確立に向けての取り組みやお考えを聞かせて頂く。その後、会場からも電子オルガンの教育楽器としての可能性、裾野を広げる活動についてご意見をお伺いしてゆきたい。

西山：私は音楽大学で作曲を専攻し、大学卒業後はピアノや電子オルガンの演奏と共に指導もおこなってきた。電子オルガンの進化に伴い 1993 年ごろからピアノのレッスンに電子オルガンを活用している。その内容の一部としてコンチェルト仕立ての編曲と電子オルガン共演のピアノ発表会を開催してきた。ご存知のとおり電子オルガンはオーケストラの再現ができる。その利点を生かしてピアノレッスン初心者から電子オルガンとのアンサンブル体験をし、それが継続・習慣化することで、ブレスやインザッツ、フレージングがわかり、相手を感じ、さらに構成を考えての演奏、・・・という「究極のソルフェージュ」となっている。また、ソルフェージュ力のみならず、思いやり、協調性、責任感も育み、人間力の向上にもつながっている。

電子オルガンには音色によるイメージ→想像力→表現力向上→音楽的な演奏、などピアノだけで

は達成できない多くのプラスαの効果が期待できる。

私は、初心者（幼児、児童）にピアノで指の訓練とともに電子オルガンを活用した協奏曲スタイルのピアノレッスンで音楽性を養い、やがて電子オルガンのエクスプレッションペダルに足が届くようになった頃にこれまで養った音楽性を生かし電子オルガンを学習させるという方向性で生徒を指導している。

次に、ここまでご紹介した私の展開する音楽教育からさらに発展させる試みを展開した。2016 年 8 月、公募で出演者を募集し、電子オルガンを活用したコンサートを開催し好評を得た。

これらの経験を通じ、ピアノ指導者も電子オルガン体験をして、「電子オルガンも弾けるピアノ指導者」を増やすことで、電子オルガンの裾野の拡大にもなると強く感じている。

柴田：ありがとうございます。次に小林ひとみ先生をお願いします。

小林：私は生粋の阿波っ子で幼少よりカワイのドリマトーンに親しみ、カワイ音楽学園卒業後はさらにドリマトーン大好きというエネルギーで演奏、教育をして電子オルガンの普及活動をしている。私が電子オルガンに大きな魅力を感じるのは多彩なレジストレーションと究極のソロ楽器という点である。そういう意味では西山先生のご発表とは異を呈するかもしれない。私は、これまでカワイドリマトーンコンクールに何年も出場してきた。つまり、賞を受賞するまでに長い時間を要したということであるが、その間に多くの挫折や苦労も味わった。しかし、それ以上にやっと入賞した際の達成感、喜びは大きく、今思えば毎回のコンクール経験も自分自身の大きな財産になっている。このことより自分の生徒にもコンクール、イベント等の演奏機会での達成感が大切！と説き、積極的に出場の手助けを与えている。またその際の（電子オルガンの「魔法のようなもの」＝レジストデータ）データづくりを徹底して行い、生徒に提供している。生徒も次はどんな音がでてくるのか期待している。前述したが電子オルガンは究極の

ソロ楽器「コロッケのモノマネ芸」のような「なんちゃって」でもインパクトのある独自の音楽像を目指している。

最近、カワイピアノ宣伝ポスターで「ピアノ演奏は脳にいい」という宣伝文言が展開されている。私は手足を駆使し足でリズムをとる音楽的基盤がある電子オルガンこそ、「脳にもっとよい楽器」として電子オルガンを一般社会向けの宣伝に載せ積極的に展開するべきとも考えている。

私はカワイ音楽教室に所属しているが、電子オルガンの教材についても問題を見出している。カワイでは教則本が少なく、その上に改定がされておらず、教則本に取り上げられている曲も古く、教材が希薄なことを私は問題視している。ピアノではバイエルをはじめとした楽器共通の教則本が多数存在する。私は電子オルガンの初期教材をメーカーの壁を越えて作っていく必要性を強く感じているし、私自身が教材の開発に着手していくと決断している。また、コンクールについてメーカー主導型から一般の音楽コンクールに電子オルガン部門を設立することも普及の道と考える。今の私は、カワイが電子オルガン製造から撤退するという現実には戸惑っているが、このことで個々人の音楽が終わるわけではない。皆で知恵を出し合っていく時代の到来だと考えている。

柴田：小林先生、電子オルガン愛が溢れる熱いご発表ありがとうございます。次に高橋 豊先生お願いします。

高橋：私は電子オルガン演奏を通じ、これまで多くの楽器の演奏家や声楽家と共演する機会を得てきた。その経験から電子オルガン奏者・電子オルガン音楽はいい意味でのスキマ産業と考えている。私は、さらに活動を継続し、電子オルガンをオーケストラ代用品からオーケストラとピアノの中間位置「第三カテゴリー」として音楽の世界に於ける電子オルガンの存在を確立していきたい。

コンチェルトは様々な楽器にとっての究極のアンサンブル作品といえるが、その楽器の演奏技術を磨く音楽大学でさえ協奏曲体験は難しい。

そこで電子オルガンアンサンブルで「受け皿」を作り、「コンチェルトクラブコンサート：エレクトーン伴奏による協奏曲の楽しみ」を始めている。この活動は、各楽器ソリストの協奏曲体験のみならず、電子オルガン奏者の育成の場ともなっていると考えている。

これまでの経験から電子オルガン伴奏の利点は、

小回りが効く、オーダーメイド的な対応が可能なのが挙げられるといえる。この利点を体感してもらう機会を多く作り、さらにニーズも拡げていきたい。同時に私が主張する「第三カテゴリー」に対応した電子オルガン奏者の育成にも力を入れてゆきたいと考えている。

この育成には経験豊富で優秀な電子オルガン指導者はもちろんであるが、オーケストラ各楽器などの他の専門分野の演奏家・教育者からの教授システム「チームティーチング」が必要であることを提唱したい。

今、電子オルガンの世界で生じている閉鎖的環境からの解決策として、元々メーカーの壁などない他の楽器演奏家と共演を重ねることで、演奏者本来の資質を強化することが奏者として重要であると共にボーダレス化が必要である。

柴田：高橋先生、ありがとうございます。オーケストラとピアノとは異なる第三のカテゴリー確立に大きな期待をしたい。フロアーから何かご意見・ご追加はあるか。

佐藤文行氏：私は声楽家であり、音楽事務所も経営している。そして、過去に何度も電子オルガンと共演もしている。本学会で以前も発言したが、電子オルガン演奏者のメーカーに頼った従来のあり方（楽器の貸し出し運搬、企画、場所の提供等）に甘んじたことが、現在の苦境を招いたと考えるが、電子オルガンに関わる皆さんはどう感じているのか。自立し、採算も考慮した活動をしないとこの世界の隆盛につながらないと思う。

森松慶子氏：生演奏が求められる場面は実は沢山ある。その掘り起こしや、オーダーに合わせた音楽を提供すること、楽器の運搬の工夫など、草の根の活動を通じて裾野を拡げられる可能性を感じている。私自身は、その全ての機会に電子オルガンで音楽できることに感謝し臨んでいる。

柴田：電子オルガンは、その楽器に特徴があるのではなく、奏者が自ら音楽を考えて編曲し演奏するというマンパワーこそが特徴である。今まで電子オルガン奏者側はマネジメント面がおざなりになっていて大道的な発展が遅れたともいえる。奏者のユニオンなども含めて今後の課題であろう。また、発信することで一発逆転できるネット社会の到来で、まだまだ電子オルガンに希望はあるといえる。今後、音楽初期教育で電子オルガンと出会っているはずの潜在的な裾野を拡げたい